

「当たり前」を問い直す

おおくし ひさよ
大串尚代

(慶應義塾大学文学部教授)

二〇年前には想像もししていなかったようなもの——スマートフォン、タブレット、SNSなど——がいつのまにかわたしたちの生活の「当たり前」になっている。一方で、一九世紀や二〇世紀の著作を読むと、現在と大きく変わっていないことに愕然とすることもある——たとえば経済的格差や、マイノリティとされる人々への差別などだ。文学は往々にして、当たり前とされる社会規範に違和感を持つ人々や、多様性を求める人々の苦しみを描き続けてきた。この苦悩はいつまで描かれなければならないのだろう。

小泉信三賞を受賞した福田有佳さんの『「全性愛論」』は、社会における異性愛規範という「当たり前」を再考する。愛とはなにか。愛の対象は性別によってのみ規定されるのか。人間は多様なセクシュアリティを持つことができるか論じ、性的マイノリティへの理解を求める本論

では、荒削りながらも力強い議論が展開され、心を揺さぶられた。重要なのは、本論文が「一〇〇年後の世界を生きる」というテーマで執筆されていることだ。この先百年の間にわたしたちは異性愛規範を、そして社会を変えていけるのか、本論は問いかけている。

格差の問題を階層間の流動性ととも論じているのが、次席となった澤田裕翔さんの「一身独立未だならず、いはんや」である。「福澤論吉が今の日本を見たら」というテーマで執筆された本論文は、一般に実学を重視するとされる福澤論吉の教えは、決して「コスパ志向」ではないことを論じる。本論は特権（privilege）を持つ人々が「当たり前」と考えている状況に待ったをかける。福澤の「近代的個人主義の確立」の意義を論じる本論は、現代における階層の固定化を打開するための積極的（アクティヴ）是正措置と福澤の教えを接合させた力作である。

佳作となった三作品も「当たり前」をもう一度考え直そうとする姿勢が見て取れる。森春太郎さんの「パーテーションの沈黙の恍惚」は、コロナ禍でいつのまにか日常に当たり前になった透明のパー

小泉信三賞選評

高校生のみた現代、未来

おがわらまさみち
小川原正道

(慶應義塾大学法学部教授)

コロナ禍も三年目に入り、二月にはウクライナで戦争がはじまった。身近な生活空間から世界情勢まで、決して安定的とはいえないなか、高校生の目には、今の世界、そしてこれからの世界が、どのように映っているのだろうか。

入選作品はこうした問いに対し、期待と想像以上の回答を寄せてくれた。百年後の世界に、「自由恋愛の再解放と性的マイノリティの観念的滅絶」を望み、異性愛を所与のものとして認知させてきた社会の欺瞞を暴露し、自己の確立と相互尊重を訴えた福田論文には、その論理展開や文章力、メッセージ性において、最も強いインパクトを受けた。小泉賞を受賞した所以である。

翻って、現代世界はどうあるべきか。福澤諭吉の門閥制度批判、実学の奨励を踏まえて、Z世代のコスバ志向や格差問

題を論じ、階層流動化のためのアフアータイプ・アクションの採用を提唱したのが、次席の澤田論文である。例年、福澤関連の課題には応募が少なく、福澤研究者として寂しく思っていたが、本論文は福澤のテキストを丁寧に読み解いた上で、現代社会への処方箋を示した力作であった。

この三年間、高校生を包み込んできたコロナ禍に対して、学問的考察と自身の体験を踏まえた論文二編が佳作に選ばれた。

廣瀬論文は、マスクのために人の表情が見えず、リアルなコミュニケーションが減少したことで、乳幼児の発達が遅れているとして、透明マスクの導入や、乳幼児と触れあう機会の創出、乳幼児への関心を向けることなどを提示している。電車の車内でスマホを持たなかったとき、赤ちゃんの笑顔と出会えたというエピソードが添えられ、社会への問題提起に自身の決意表明が込められている。

コロナ禍で登場したパーテーションについて論じたのが、森論文である。パーテーションから受ける視覚的印象について、絵画や映画におけるガラスの透過性

と反射性に着目して考察を加えた上で、そこに生まれる曖昧な隔たりは、スマホを介した世界との

Z世代が創るこれからの未来

権丈善一 けんじょう よしかず

(慶應義塾大学商学部教授)

毎年のことであるが、三月に審査員で課題を決める時は、五つの課題に高校生がどのように応えてくるのかを想像する。今年は例年になく、私たちが思っていたような角度から打ち返してくれていた。

五つの課題で、応募者総数が二八・五%と最も多かったのは「エンパシー (empathy)」であった。この課題から、ひとつの佳作、梅山昊子さんの論文が選ばれた。「千と千尋の神隠し」の観劇から始まり、empathyという言葉が知られることになったブレイディみかこ氏の小説の語を経て、論文のタイトル『「大丈夫。あなたはやっていける。」と伝えること」と結論づけられる論の展開が評価されている受賞であった。

パンデミック関連の課題は、今年は二年目になる。応募者総数の中のこの課題選択率は二〇二一年は三二・六%、今年二〇二二年も一四・六%と少なくなっ

た。しかし、日本を含めて世界的にはパンデミックの経験は三年目に入っており、パンデミックがもたらした客観的影響が把握されるようになってきている。そうした中で、二つの佳作が選ばれた。廣瀬はるさんと森春太朗さんの論文である。

廣瀬さんは、二〇二〇年半ば以降に生まれた乳幼児の言語能力、認知能力が低下している研究を目にすると。そこで、「コロナ禍で育つ乳幼児のためにできること」というテーマの下に、自らが貢献できる方法を考えていった力作である。

森さんは、パンデミックを振り返り、彼の心に絡んだという「飛沫防止の透明なパーテーション」という意表を突くモチーフを起点として、古今東西の文献を縦横無尽に紡ぎながら思考を巡らして論文「パーテーションの沈黙の恍惚―それは世界を語れるか―」をまとめていく。その才覚を、是非原稿に目を通して確かめてもらいたい。

小泉賞の中では、福澤諭吉関連の課題は毎年出される。今年は、「福澤諭吉が今の日本を見たら」という、今の

小泉信三賞選評

「今」を書く

小西祥文^{こにしよしみ}

(慶應義塾大学経済学部教授)

私は今回初めて、小泉信三賞の審査員を担当させて頂いた。私は、数理的なモデルと統計データを用いて経済学的な仮説を検証することを生業としている。そのため、小論文という全く畑違いの審査が果たして私に務まるのだろうかというのが、審査員のお話を頂いた時に抱いた正直な感想であった。

しかし、(経済学における)良い研究論文と良い小論文には幾つかの類似点もある。それは、視点や主張の斬新さ・面白さ、論理性と客観性、そして何より、読み手を飽きさせない書き方である。応募された作品には、エッセイ、私小説、写実的描写、論述形式など実に様々な小論文があった。しかし、審査員の方々が推薦された小論文は、共通して書き方が抜群に優れていた。

良い文章を書くのは難しい。頭に浮か

んだ言葉や文章をそのまま書けば良い文章になる訳ではないが、頭にあるイメージが十分な具体性と鮮明さを持つていなければ良い文章は書けない。書こうとするテーマに対して十分な知識を持つていなければ良い文章は書けないが、かと言って、知識に拘泥するだけで、自らの体験や考えと重ね合わせ「自分の言葉」にできなければ良い文章にはならない。今回の受賞者は、いずれも「自分の言葉」を持った優れた書き手ばかりであった。

小泉信三賞を受賞した福田有佳さんは、一〇〇年後の世界をテーマに性的マイノリティについて論じた。愛の種類と性質(異性愛、同性愛、両性愛、無性愛)とその由来(本能か、学習か、社会的規範か)について、自身の体験と重ね合わせながら理論的に論じつつ、一〇〇年後の世界において性的マイノリティが自然に生きられる世界を展望している。そんな世界への筆者の熱望が、文章に力強さと鮮烈さを与えている。

次席を受賞した澤田裕翔さんは、福澤諭吉の目を通して階層化した現代社会を観察する。生まれ持った身分ではなく、経済格差と社会的地位(人種・性別・境遇)

によって不平等が固定化されてしまう現代社会を、「今」の福澤諭吉が批判的に評価する。やや知識に引きずられ引用が多くなりがちである

小泉信三賞選評

書くは値千金

早川 浩
はやかわ ひろし

（株式会社早川書房代表取締役
社長・慶應義塾理事・評議員）

「黒澤監督に『天国と地獄』のような社会派ミステリを推薦して欲しい」と日本映画界のある大物プロデューサーに頼まれたのは、監督が「デルス・ウザーラ」を撮り終えた直後だった。三日三晩、世界の「クロサワ」に六〇本程の作品を勧めた。その時、監督がふと私に漏らした言葉が今も脳裏に浮かぶ。

「良い映画を作るには脚本がしっかり書かれていなければならない。俳優と違ってお金をかければ良い脚本ができるとは限りませんから」

脚本と論文では目的と形式が違うが、書き手が他人を納得、そして感動させることは変わりはない。

さて、今年の論文は優秀な作品が揃っていたので、例年以上に議論を呼んだ選考会となった。

まず佳作入選の一作目は梅山さんの「大丈夫。あなたはやっていける。」と

伝えること」。エンパシーとシンパシーの違いを、辞書の定義やブレイディみかこの著書を引きつつも、筆者の観劇体験を軸にして論考を進めていく姿勢が良い。借り物の言葉ではなく、苦しい体験から生まれた自分の言葉で語られているので説得力があり好感が持てた。

同じく佳作、森さんの「パーテーションの沈黙の恍惚」それは世界を語れるか——は、コロナ禍以降、我々の日常に登場したパーテーションの透過性／反射性、内部／外部という両義性に着目し、現代社会との関係を考察する論文。特に絵画、美術、映画論などを引用した前半は立派な芸術論になっている。コロナ後の社会にいかに関与していくべきかという展望があればより高い評価を得られた。

廣瀬さんの「コロナ禍で育つ乳幼児のためにできること」は、乳幼児がどのような発育過程をたどるか、コロナ禍による影響、改善策の提案と、論の骨子が明確で、いずれも根拠となる文献に基づきながら丁寧にまとめている。文章も読み易い。結論に独自性が出